

ひふみ神示 4 キ

「キつけてくれよ。キがもとざぞ、キから生まれるのざぞ。心くばれと申してあろが、心のもとキざぞ、すべてのもとキであるぞ、キは⊙（よろこび）ざぞ、臣民みなにそれぞれのキ植えつけてあるのざぞ、うれしキはうれしキこと生むぞ、かなしキはかなしキこと生むぞ、おそれはおそれを生むぞ、喜べばよろこぶことあると申してあろがな、天災でも人災でも、臣民の心の中に動くキのままになるのざぞ。この道理分かるであろがな。爆弾でもあたると思へばあたると思へばあたるとおそろしいことになるのざぞ、ものはキから生まれるのざ、キがもとぞ、くどくキつけておくぞ」

何事に向ってもまず感謝せよ。ありがたいと思え。始めはマネごとでもよいぞ。結構と思え。幸せと思え。そこに神の力加わるぞ。道は感謝からぞ。不足申せば不足うつるぞ。心のままくどう申してあろうが。病気でないと思え。弥栄と思え。病治るモト生まれるぞ。キが元ぞ。何事くるとも何クソと思え。神の力加わるぞ。恐れは恐れ生むぞと申してあろうが。一聞いて十悟らねばならんぞ。今の人民には何事も平面的に説かねばわからんし、平面的では立体のこと、次元の違うことはわからんし、肚で悟りて下されよと申してあろう。

何事が起こってきてもそなたはまず喜べよ。それが悲しいことでも喜んで迎えよ。喜ぶ心は喜び生むぞ。人民喜べば神喜ぶぞと申してあろが、天地晴れるぞ。輝くぞ。そなたは先ばかり見ているぞ。足で歩くのじゃ。足もとに気付けねばならんぞよ。

悪は悪のみに働きかけ得るのであるぞ。善にむかって働いても、善はビクともせんのだや。ビクつくのは、悪に引き込まれるのは、己に悪あるからぞ。合わせ鏡と申してあろうが。悪の氣断ちて下されと申しておろう。心の鏡の凸凹無くなれば悪うつらないのざ。悪は無きものぞ。無きとは力無きことぞ。悪あればこそ向上するのであるぞ。悔い改め得て弥栄するのであるぞ。人間の能あるざぞ。キを忘れてはならん。

⊙（かみ）の民の言葉は⊙（かみ）讚えるものと思え、てんし様讚えるものと思え、人褒めるものと思え、それで言霊幸わうぞ、それが臣民の言葉ぞ。悪き言葉は使ってはならんぞ。言葉は善きことのために神が与えているのざから忘れんようにな。

人間を幸福にするのは心の向け方ひとつであるぞ。人間はいつも善と悪との中にあるのであるから、善のみということもなく悪のみということもない。内に神が居りて外が人に和し、内に霊が居り外が身体に和せば、それでよいのじゃ。そこに喜び生まれるのじゃ。天国の意志は人間の喜びの中に入り、幽界の意志は悲しみの中に入る。

そなたは心を持っておろうがな。心があれば心の属する世界のある道理分かるであろが。心で描いて、心でまずつくり出してから行為することも、その順序もわかるであろがな。心の動きが先で、肉体がその後動くこともわかっておろうがな。心の世界に

ないものは物質の世界にない道理もわかっておろうがな。何故に迷うのぢや。霊界が主で現界が従であること、わかって下されよ。逆立ちしてそなた自身で苦しんでいること、早う得心して、嬉し嬉しで暮らして下されよ。

一切のものは渦であるぞ。同じことを繰り返しているように、人民には、世界が見えるであろうなれど、一段ずつ進んでいるのであるぞ。木でも草でも同様だぞ。前の春と今年の春とは、同じであって違って居ろうがな。行き詰まりがありがたいのぢや。進んでいるからこそ、行き当たり行き詰るのぢや。省みる時与えられるのぢや。悟りの時与えられるのぢや。ものは、放すからこそ掴めるのぢや。固く握って戸閉めていてはならんのう。扉あけておけともうしてあろうが。着物脱いで裸体となることつらいであろうなれど、脱がねば新しい着物きられんぞ。裸になってぶつかれよ。神様も裸になってそなたを抱いて下さるぞよ。重い石乗せたタクアンうまいのであるぞ。

・・・読み解きはその11に続く

その11

ひふみ神示4

氣と言霊で読み解きましょう

「キつけてくれよ。キがもとぞぞ、キから生まれるのぞぞ。心くばれと申してあろが、心のもとキぞぞ、すべてのもとキであるぞ、キは[⊃](よろこび)ぞぞ、臣民みなにそれぞれのキ植えつけてあるのぞぞ、うれしキはうれしキこと生むぞ、かなしキはかなしキこと生むぞ、おそれはおそれを生むぞ、喜ばばよろこぶことあると申してあろがな、天災でも人災でも、臣民の心の中に動くキのままになるのぞぞ。この道理分かるであろがな。爆弾でもあたると思へばあたるのぞぞ、おそれるとおそろしいことになるのぞぞ、ものはキから生まれるのぞ、キがもとぞ、くどくキづけておくぞ」

「キがもとぞぞ、キから生まれるのぞぞ。心くばれと申してあろが、こころのもとキぞぞ、すべてのもとキであるぞ。キはよろこびぞぞ、臣民みなそれぞれのキ植えつけてあるのぞぞ。」

キは「よろこび」と言っている。

神の歓びが光となってキ真善美愛となって現われるという言葉の思い出してください。われわれの心のもと(直霊)は歓び=神の歓びなのです。

キ、真、善、美、愛=言霊イ(意志)、言霊オ(知識)、言霊ウ(欲望)、言霊エ(叡智)、言霊ア(感情)、^いに対比する

(参考までに言霊ではこころの住処は五次元 アイウエオです。進化の過程から順に言霊ウ→言霊オ→言霊ア→言霊エ→言霊イ それで重なり合っているお寺の五重塔は心の住処「家」の語源です。五つに重なる五^い重です。下の階からウ→オ→ア→エ→イ の宇宙になって、真上か

ら見ると重なり合っている。進化は一番下からウの宇宙から最後最上階のイの宇宙の構造になっている。))

もとの文にもどり キを意志に書き換えると

「意志がもとざぞ、意志から生まれるのざぞ。心くばれと申してあろが、こころのもととは意志ざぞ、全てのもととは意志であるぞ。意志はよろこびざぞ、臣民みなそれぞれの意志植え付けてあるのざぞ。」

となります。

「古事記と言霊」島田正路著より 言霊から説明すると 意志はイ イ(イ)ザナギ・イ(牟)ザナミのイ イは親音と呼ばれています。

父韻はイの段(キシチニヒミイリ)を指しローマ字で書くと、Ki Si Ti Ni Hi Mi Yi Ri ですが厳密に言いますと K, S, T, N, H, M, Y, R で発音できません。リズムなのです。そこで親である i(イ)が発音できるように支えています。(イは人間が生まれると、と父韻にくっつき動き出します。)

日本語の不思議はとんでもないことが秘められている言語です。

こころはコロコロ変わりつかみところがないものと思われていますが、人間の心の使い方は4通りしかありません8個の父韻の並びでそれが決まります。並び方は自分から相手にこころを伝えるときの意志の変遷を示します。

① チキミヒリニイシ 天照の配列 言霊エを住処にする人

② チキリヒシニイミ

月夜見の配列 言霊オと言霊アを主に住処にする人

③ キチミヒシニイリ

須佐之男の配列 言霊ウと言霊オを主に住処にする人

④ キシチニヒミイリ

言霊イを住処にする人 時所に置いて配列を自由に使う 神 釈迦 老子 キリスト等

で8個の父韻全体でも意志(意志の変遷として使われ)言霊イと混同しがちですが注意ください

父韻(リズム) K, S, T, N, H, M, Y, R が母音(もとの宇宙に存在して只あるだけでそれ自体では動き出さない)アイウエオ(a, i, u, e, o)に働きかけてか(ka, Ki, Ku、・・・)か、き、く、・・・と子音が生まれ 日本語の五十音が完成します。

その一音一音を「言霊」といいます。

キとは(創造神)意志つまり父韻を指します。父韻が働かないと母音はうごかないのです。

8個あり=八卦=八正道=ヤハウエイ=八幡様 などとして世界に伝わっています。この父韻を創造神=神と呼びます。

こころは、アイウエオの五つの次元に住んでいます。バイブレーションとし存在している。

その父韻のことをここではキと表現しています。

「うれしキはうれしキことを生むぞ、かなしキはかなしキこと生むぞ、おそれはおそれを生むぞ、喜べばよろこぶことあると申してあろがな、天災でも人災でも、臣民の心の中に動くキのままになるのぞぞ。この道理分かるであろがな。爆弾でもあたると思へばあたるとのぞぞ、おそれるとおそろしいことになるのぞぞ、ものはキから生まれるのぞ、キがもとぞ、くどくキづけておくぞ」

意志に置き換えると

「うれし意（志）は嬉しいことを生むぞ、かなし意（志）はかなしきこと生むぞ、おそれは（おそれを意すると）おそれを生むぞ、喜べば（よろこびを意すると）喜ぶことあるともうしてあろがな、天災でも人災でも、臣民の心の中に動くキ（意）のままになるのぞぞ、この道理分かるであろがな。

爆弾でもあたると思へばあたるとのぞぞ、おそれるとおそろしいことになるのぞぞ、ものはキから生まれるのぞ、キがもとぞ、くどくキづけておくぞ」

天災も人災も、心の中に動くキ（父韻の構成のまま＝言霊）のまま、爆弾でもあたると思えばあたると言っている。

言霊からみると、こころが選んだ言霊（言葉）のひびきがバイブレーションとなって同調するものを引き寄せることになる。

キは意志の8個の父韻のことを指します。つまり言葉の生まれるもとなのです。創造神です。神と呼ばれ崇められたものなのです。

ひふみ神示の別な箇所書かれてあることに「⊙（神）は言葉ぞ、言葉はまことぞ、息吹ぞ、まこととは、まつり合した息吹ぞ、言葉で天地濁るぞ、言葉で天地澄むぞ、戦なくなるぞ、神国になるぞ、言葉ほど結構なこわいものないぞ。」

があります。以上のことがわかればこの意味は理解できると思います。

・・・その12に続く

その12

ひふみ神示4

「何事に向ってもまず感謝せよ。ありがたいと思え。始めはマネごとでもよいぞ。結構と思え。幸せと思え。そこに神の力加わるぞ。道は感謝からぞ。不足申せば不足うつるぞ。心のままくどう申してあろうが。病気でないと思え。弥栄と思え。病治るモト生まれるぞ。キが元ぞ。何事くるとも何クソと思え。神の力加わるぞ。恐れは恐れ生むぞと申してあろうが。一聞いて十悟らねばならんぞ。今の人民には何事も平面的に説かねばわからんし、平面的では立体のこと、次元の違うことはわからんし、肚で悟りて下さ

れよと申してあろう。

何事が起こってきてもそなたはまず喜べよ。それが悲しいことでも喜んで迎えよ。喜ぶ心は喜び生むぞ。人民喜べば神喜ぶぞと申してあろが、天地晴れるぞ。輝くぞ。そなたは先ばかり見ているぞ。足で歩くのじゃ。足もとに気付けねばならんぞよ。」

読み解きます

何事に向かってもまず感謝せよ。は感謝のころは物事のひかりの当たる部分へと向けさせます。つまり光りを見ることになります。最初は真似事でもでも良いと言っています。結構と思え。幸せと思え。神の力加わるぞとは光の当たる方向に向き、結構だな。幸せだなど思うことは、その言葉「言霊」を意識します。その父韻の構成が言葉通りの人生を作り始めます。だから神（父韻）の力なのです。逆に不足とか不満を思うとその言葉通りの人生を作り始めます。心のまま（言葉選びのまま）

病気でない思え。弥栄と思え。病治るもと生まれるぞ。病気を思うと、ころは病気の面ばかり、つまり影ばかり見続けます。その時の思い（ころが選んだ言葉）は影の言葉でその言葉通りの人生を創ります。逆に今が病気でも、なにくそと、光りを思い大丈夫とを巡らせばその人生を創り出します。

キがもと、ころで思う言葉「言霊」がもとなのです。

平面的では立体のこと、次元の違うことわからんし、肚でさとりてくだされよ とは今言葉で読み解きを説明していることは、すべて平面的に説明しています。立体とはなにか次元の違うこととは何かを説明します。立体的とは動き、流れが加わります。アイウエオの母音を発声すると伸ばした手に氣の流れが起こります。それをこの文章では確認できません二次元の文だからということ、つぎに次元が違うとは人間の思いは音に（バイブレーションに）思い（言霊）を乗せて命となって生きていると言うことです。過去の人の素晴らしい生き様を知ったとき、その人の心に勇氣と感動を呼び起こします。時間を超えて勇氣に震え感動します。

すべて喜んで迎えよ、その心が喜びを生み、神歎び、天地が晴れるぞ。輝くぞ。

そなたは先ばかり見ているぞ。足で歩くのじゃ。足下に気をつけねばならんぞよ。つまり今に心が無く、先の心配や先を見て今の不満な自分ばかり見ている。生きているのは今、今のしていることに心に向けて（言葉を思い氣を発して）身魂と和して身体を動かすのが大事と言っている。そうすると祈り=イノリ=意^{いのり}宣り でなりたい自分を言葉

に出して宣ると 直^の霊が自分の肉体や環境を周りを友達をバイブレーションで引き寄せて思いが実現するということ

・・・その 13 に続く

その 13

ひふみ神示 4 キについて

「悪は悪のみに働きかけ得るのであるぞ。善にむかって働いても、善はビクともせんのだ。ビクつくのは、悪に引き込まれるのは、己に悪あるからぞ。合わせ鏡と申してあろうが。悪の氣断ちて下されと申しておろう。心の鏡の凸凹無くなれば悪うつらないのぞ。悪は無きものぞ。無きとは力無きことぞ。悪あればこそ向上するのであるぞ。悔い改め得て弥栄するのであるぞ。人間の能あるぞ。キを忘れてはならん。」

⊙（かみ）の民の言葉は⊙（かみ）讃えるものと思え、てんし様讃えるものと思え、人褒めるものと思え、それで言霊幸わうぞ、それが臣民の言葉ぞ。悪き言葉は使ってはならんぞ。言葉は善きことのために神が与えているのだから忘れんようにな。」

読み解きます

悪は悪のみの働きかけ得るのであるぞ。善に向かって働いても、善はビクともせんのだや。

この意味は、善は光り 悪は影 光りが影のもとである。影は光りには働きかけられないのと同様に光りに向かって真っ直ぐに立っていれば悪は映らない。ビクつくのは、悪に引き込まれるのは、己に悪の心があるからぞ。（真っ直ぐ光りに向かって歩いていること）合せ鏡と申してあろが。

身体を通して、二人で氣の流れで確認できます。（悪は善に働きかけても善はビクともしないことを）

悪あればこそ向上するのであるぞ。（悪がある為にそれが悪だと認識できる。）悔い改めて反省して光りに進むために、悪の御役はあります。

人間のハタラキ（能）あるぞ。キを忘れてはならんとは、

生まれたとき父韻のハタラキが始まります。それを使うことが人間には出来ます。キ（父韻から言葉が生まれそれが物事を創造することを）忘れてはならん ということ

神の民の言葉は神讃えるものと思え、天使様讃えるものと思え、人褒めるものと思え、それで言霊幸わうぞ。言葉は良きことのために神が与えているのだから忘れんようにな。

言葉についても何度もひふみ神示の中に出てきます。重要なポイントです。

、良い言葉を使うとよいものを創造する、その方向が光りの方向で弥栄（続いて栄える世）の方向だからです。その方向に歓びあり嬉し嬉しの世界があるからです。

悪い言葉を使うと、悪いものを創造し影は必ず行き詰まり、ひいてはその方向に進むことは宇宙をも行き詰まることを意味しています。弥栄が途絶えることです。

言葉（言霊）は良きことのために（弥栄の世を創るために）神が与えているから忘れぬようにな。

・・・その 14 に続く

その14

ひふみ神示4 キについて その14

「人間を幸福にするのは心の向け方ひとつであるぞ。人間はいつも善と悪との中にいるのであるから、善のみということもなく悪のみということもない。内に神が居りて外が人に和し、内に霊が居り外が身体に和せば、それでよいのじゃ。そこに喜び生まれるのじゃ。天国の意志は人間の喜びの中に入り、幽界の意志は悲しみの中に入る。」

そなたは心を持っておろうがな。心があれば心の属する世界のある道理分かるであろうが。心で描いて、心でまず作り出してから行為することも、その順序もわかるであろうがな。心の動きが先で、肉体がその後動くこともわかっておろうがな。心の世界にないものは物質の世界にない道理もわかっておろうがな。何故に迷うのぢや。霊界が主で現界が従であること、わかって下されよ。逆立ちしてそなた自身で苦しんでいること、早う得心して、嬉し嬉しで暮らして下されよ。」

読み解きます

人間を幸福にするのは心の向け方ひとつであるぞ。(つまり生まれたときから先天的に働いているリズム律動、つまり父韻で言葉を選ぶ選び方、ひとつであるぞということ)

こころ(古代人は言葉を運ぶ船と言った)で光りの面を見ながら言葉を選び発するか、影を見て言葉を発するかのどちらかである。光りを見れば幸福になるということ。

人間は善と悪との中にいるからとは、つまり人間は善も悪も認識できる立場にある(霊と肉で出来ている)ということとは善と悪の中にいるということなのです。

内に神が居りて外が人に和し、とは(自分の心の中の良心を忘れずに、日常人に接して争わず)

内に霊が居り外が身体に和せば、それで良いのじゃ。

内に霊が居り、とは(霊体「父韻の選んだ音バイブレーション」の内に霊「直霊」が居り)

外が身体に和せば、とは(肉体霊「先祖から受け継いだ霊」が肉体に和すること)その状態が良いのだと。

そこによろこび生まれるのじゃ。天国の意志は人間の喜びの中に入りとは、(神界の創造力は喜びの中にあり)、幽界の意志は(人間の影に向かった思いの集合した層「幽界」つまり影に向かう言葉「言霊」の音の集合した層、の創造力は悲しみの中に入る。)つまり光りを思うと幸せに向かい幸せをつくり出し、影を思うと不幸に向かい不幸をつくり出すということ

そなたは心を持っておろうがな。心があれば心の属する世界のある道理分かるであろう

うが。こころの属する世界とは（その前にまず肉体は三次元空間に居り、時間と共に変化します。こころはアイウエオ五次元の宇宙に居り、空間、時間の制約を受けないということ）

心で描いて、心でまずつくり出してから行為することも、その順序もわかるであろうがな とは、こころで言葉を思いキを流して初めて身体が動くという事実 氣を失うという言葉がありますが氣を失うと身体の動きが全く出来なくなります。人間は自分の身体が動くときは意識しても、無意識でも、父韻が働き言霊をつくり出し氣の流れが起り身体が動きます。つまり心でまずつくり出して行為すると言うことです。

心の動きが先で、肉体がその後動くこともわかっておろうがな。つまり、心の世界にないものは物質の世界にない道理もわかっておろうがな。心の世界にないものは物質の世界にもないとは（心の世界とは霊界のこと物質の世界とは地上界のこと 心の世界のことを昔は天とよんだ 物質の世界を地とよんだ 天が地に映って居る、今の心と身体の仕事も同じです。陰と陽の仕事もマツリの仕事。）

何故に迷うのぢや。霊界が主で現界が従であること、わかって下されよ。（心の働きが主 その後形としてとして現れ出るので従ということ）

逆立ちしてそなた自身で苦しんでいること、早う得心して、嬉し嬉しで暮らして下されよ。 とは（心の向きを無視して、欲で身体を動かして影の方向に進み、つまり光りに向かわないで影を思い光りに向かうと現われる結果を望んで、苦しんでいること（逆立ちして）早く得心して、嬉し嬉しで暮らして下されよ。）

・ ・ その 15 に続く

その 15

「一切のものは渦であるぞ。同じことを繰り返しているように、人民には、世界が見えるであろうけれど、一段ずつ進んでいるのであるぞ。木でも草でも同様だぞ。前の春と今年の春とは、同じであって違って居ろうがな。行き詰まりがありがたいのぢや。進んでいるからこそ、行き当たり行き詰るのぢや。省みる時与えられるのぢや。悟りの時与えられるのぢや。ものは、放すからこそ掴めるのぢや。固く握って戸閉めていてはならんう。扉あけておけともうしてあろうが。着物脱いで裸体となることつらいであろうけれど、脱がねば新しい着物きられんぞ。裸になってぶつかれよ。神様も裸になってそなたを抱いて下さるぞよ。重い石乗せたタクアンうまいのであるぞ。」

読み解きます

一切のものは渦であるぞ。（右に行かんとする者と左に行かんとする者をつなぎ合わせるのは渦ぞ、渦の神の働きぞ。素戔鳴尊のハタラキ。この働きによりて生命あれるのぞ、力生まれるのぞ、渦がマツリであるぞと、ひふみ神示の別の箇所記述があります。）

自然界に竜巻、台風、津波、潮の流れ、川の流れ、等至る所で渦が見られます。この地上界をしらす（統べる）のは素戔鳴尊のハタラキと古事記の中に出てきます。（氣の流れで二人で右と左をつなぐのが渦であると体験出来ます。）

渦の働きによりて生命あれど、力生まれるぞ（息を吐くとその氣は渦で流れ動き、吸うとその氣は渦で流れ込む）それにより力生まれる（氣の流れにより、男の魂から女の魂へ、外から内へ、陽から陰へ）

同じことを繰り返しているように、人民には、世界が見えるであろうけれど、（渦が働いている）一段ずつ進んでいるのであるぞ。木でも草でも同様だぞ。前の春と今年の春とは、同じであって違って居ろがな。行き詰まりがありがたいのじゃ。進んでいるからこそ、行き当たり行き詰まるのじゃ。省みるとき与えられるのじゃ。悟りの時与えられるのじゃ。前に進むから、行き詰まる。ありがたいといっている。その行き詰まりが自分の方向を修正する機会を与えてくれるのだと言っている。

ものは放すから掴めるのじゃ。固く握って戸閉めていてはならんう、自分の持っている物を手放すから次のものが掴める。戸を開けておけと申してあろうが、これからの時代は秘密にすることが駄目な時代

着物脱いで裸体となることつらいであろうけれど、脱がねば新しい着物きられんぞ。裸になってぶつかれよ。神様も裸になってそなたを抱いて下さるぞよ。

得たものを手放すと裸になり心細くつらいだろうが、手放さないと新しいものを得ることが出来ないぞ。今得てるもの手放し、何も心配せず裸になって物事に対処せよ。神も直に見放さず護ってくれるぞと 言っている。

ひふみ神示 4 キ 以上